〈希望〉植う

本田禎子　北海道

二日のみ手を通したる制服の干され春めく風がタッチす
「医療崩壊」きくだに寒しせめてもと医師なる甥にマスク送れり
「三密」は耳にやさしも戦中の標語はなべて命令形で
ひとりのみ新幹線の車両降り「出張でして」とうつむきて言ふ
愛子さん桃太郎とはトマトの名ミニ菜園に〈希望〉植ゑたり

クサカゲロウ

佐々木佳子　青森

築城より初めて閉ざす城門に堀のさくらの花びらが映ゆ
ニンゲンの顔といふのが見えてきたウイルス防ぐマスクをしても
また一歩水仙の花をかき分けて歩くカラスの黒なるひかり
「火の鳥」を読みつつ見やるドアにゐるクサカゲロウのひとつの存在
死の影をまとひて咲きしハコネウツギ学校へゆく坂の途中に

空堀

丹下美雪　埼玉

花柄にキティ、みづたま手づくりのマスクはなやぐ女の職場
このごろは人出すくなき喜多院のすみでさびしき子猫とあそぶ
空堀の底をあるけば深きこと見上ぐる空は木々におほはる
空堀はいまだに深しこもれびの揺らげるまでの時を思へり
あぢさゐの花序ふつふつとふくらみてあしたの先の未来のごとし

フラワームーン

上野隆紘　千葉

すれちがふ時に面をそむけあふコロナは隔つジョガーの仲を
迫りくる黒覆面の一団に怖ぢて身を退くジョギング・コース
どうせなら恩賜のマスク下されよアベノマスクでは戦意揚らぬ
めつきりとネオンの減りし吾が街を照らして昇る五月の満月（フラワームーン）
「ステイ・ホーム」守りて暮らすつれづれに読みをはりたり梁塵秘抄

春のコート

斎藤美衣　神奈川

春の陽は成層圏を通過してマスクを通りわたしに届く
外出をせねば不用なものたちよ　かばん、靴、鍵、財布ひかる夜
とつぷりと重たい雨だ足裏と畳の間（あひ）に水の層あり
朝ごとに父の電話を鳴らすなりいまのわたしは小さな港
着なかつた春のコートは二年分重たくなつて吊られつづけぬ

青空に立つ

小島静子　東京

山型のジャングルジムを登りつめ少女は初夏の青空に立つ
ハルジオン、ギシギシなどを路地に見て四日ぶりなるスーパーへゆく
終活と一気に写真すてしかどその幾枚が脳裏にのこる
買へざれば夜洗ひをりコロナ禍にマスク一枚大切なもの
人類はかつてマスクを着けゐしと記録されんか万年ののち

あなたは五月

白川　ユウコ＊静岡

こんにちはハローキティは口が無いマスクしたまま手は握らない
ふるさとはコロナのゆえに帰れぬを古き浴衣をマスクにしたし
夫という山脈があり寝室の北の深夜の広葉樹林
手にしたる葉書の曲がる風つよき午の道ゆく歩幅広くして
はつなつの緑の山の白い花あなたは五月また逢えるひと

夢の続き

山田恵里　愛知

生きてゆく力は太ももから湧きぬ葉桜の下自転車漕げば
自転車を押しつつのぼる坂道のひとあしごとにもの言ふ夕陽
いつか見た夢の続きかこの春は歩いて歩いてまた崖に出る
海岸をバックにＺｏｏｍ（ズーム）で講義する夫のうしろでブラウスを干す
ミシン踏む足袋の白さの浮かびくる祖母あらば百二十歳の春

フラワームーン

桑原　博　大阪

首のばし付け根の白くなるまでに甲羅干しする日永に亀は
『赤頭巾ちゃん気をつけて』のヒロインの名をもつ人に語る若き頃
息をしてゐることを意識しすぎるとリズムが狂ひぎこちなくなる
三角の鉄砲狭間より見下ろせば親子連れらが標的となる
天動説のやうに自分を真ん中に置いて見上げるフラワームーン

ひとりよがり

米田靖子　奈良

帰る所(ところ)いま気付きたりコロナ禍に胡瓜、茄子苗今年も植ゑて
ひとりよがり、ひとりよがりと草にのり天道虫がひとり遊びす
雉が鳴きなんでもありか検察庁法改正案もコロナに乗せて
「いい香(かざ)」とたけのこ御飯をよろこびき広辞苑に載る祖母の方言
髪切虫(カミキリ)はいつたいどこへ行つたやらイチジク枯らして棲む穴捨てて

優先順位

中村麗子　鳥取

つかの間をしろじろそまりたそがれの海は明日への充電はじむ
受け皿を指して支払ひうながせる店員もわれもさびしコロナ禍
蒔き時のある農作業すすめたし優先順位を知らぬ総理に
山折りと谷折りじゆんにくりかへす襞スカートよしわが日々もまた
開け閉めの場所をとらずにしづかなる引戸のやうにわれは生きたし

よきにほひ

梶原道幸　熊本

健康なひとのはだへのよきにほひかすかにはなち君はたらけり
あを白き蕾をかざす姥百合を残してゆけり草切りの人
猫背にておほよそ吾の俯けば「顔あげてよ」と妻の口癖
柔らかい堅いは触れずともわかる好きで永年摘む野蒜にて
雨しぶく簡易舗道のうへに散る椿の花は今朝も鮮(あたら)し